

橈骨動脈穿刺の合併症発生状況と問題点について

¹心臓血管研究所付属病院山崎 芳江¹、福島 洋美¹、松野 俊介¹、矢嶋 純二¹

(目的) 当院の橈骨動脈穿刺症例の合併症の発生状況と患者の不安の有無を把握する。また、その他の問題点を明確にする。(対象) 2008年4月から2009年3月の期間に橈骨動脈穿刺による心臓カテーテル検査および治療(以下カテ)を施行した症例819例。(方法) カテから退院、次回来院時、フォローアップカテまでの橈骨動脈触知の有無、疼痛・痺れ・冷感など症状の有無、血管エコー実施時の結果を追跡した。(結果) 819症例中2.2%(19例)に橈骨動脈の閉塞を認めた。退院前に確認されたのは10例であり、看護師が確認し得たのは約半数であった。後遺症を訴えている患者はなく、閉塞に対し不安を感じていた1症例も説明により軽減されていた。(考察) カテ前にアレンテストを実施していることにより橈骨動脈が閉塞した場合でも自覚症状がほぼ無く動脈触知の確認が重要となっている。今回の検討から看護師の動脈触知の技術が不十分であることが明らかになった。また、循環器経験の浅い看護師が見逃しているケースが多かった。(まとめ) 当院における橈骨動脈穿刺による閉塞率は2.2%であり、自覚症状の強い患者は少なかった。このうち約半数を看護師が見逃しており看護師の触知に対する再教育が必要であると考えられた。